



鵜久森 曇

イラスト：猫又 小町

氷の君が溶ける時

二つの肉が作る谷間に落とされ、たっぷりとした柔らかな肉に包まれることになると気持ちいいことか。その快感を貪るように、俺は腰をゆっくりと前後させる。

「っあ、こ、こう？　これで……合ってる？」

その動きに合わせるように、少しぎこちない動きで、乳房を上下させる。

「ああ、めっちゃ気持ちいい……」

俺は素直に答えた。物理的な刺激は大したことない。だが、この見事な爆乳を犯す喜びと、斎藤さんみたいな美人が自分の胸に俺の肉棒を挟み込んで、懸命に奉仕してくれているという精神的な満足感が、どうしようもなく俺を興奮させている。

「あっ……ねばねばが……」

胸の谷間から顔を出した亀頭の先からは先走りが滴っている。肉でこそがれた、雄の興奮を如実に表すその粘つく液体が胸の谷間に溜まって、ぐちゅぐちゅと音を立て始めていた。

「ああ、ごめん。ちょっと汚れちゃった、かな？」

だが斎藤さんは、首をフルフルと横に振った。

「大丈夫……その、気持ちよくなってる証拠、よね？」

見上げてくる斎藤さんの口元に、今まで見たことのない、はにかむような小さな笑顔が浮かんでいるのを見て、俺は見事に心臓を撃ち抜かれるような感覚がした。

こんなにも奇麗な、可愛い人に、こんなろくでもない事をさせているという、背徳的な悦びが、俺の中を駆け回る。

俺は少し乱暴に腰を前へと突き出した。柔らかな肉の塊の中のぬめりに擦れる感覚を突き抜け、大きく胸元から飛び出す赤黒いものが、斎藤さんの口元まで伸び上がる。

斎藤さんは一瞬びっくりした表情をした後、少し考え、そして、その俺の汚いモノの先端に、小さくキスをした。

そんな光景を見て、俺のボルテージは一瞬で振り切れた。まだまだ射精には遠い

はずだったのに、急激に睾丸とペニスの根本が燃え上がって、どっくん、と、ペニスから肛門から太腿から腹筋から、何から何まで一瞬力強く脈動したと思った直後。「きゃっ！ あ、ああっっ！ な、なにっ！」

先端から勢いよく飛び出した精液は、そのまま斎藤さんの顔を、胸元を、そして、艶やかな髪を汚していく。

その顔を白く染める粘つく液体に、斎藤さんは大きく目を見開いている。信じられないようなものを見ている目だ。だが俺はそれに構うことなく、尿道に残った精液を絞り出すように、斎藤さんの胸を左右から両手で圧迫し、腰を引いた。

当然、斎藤さんの胸に残ったものがあふれかえるわけで。

「あつ、ああ……すごい臭い……あ、だめ、こぼれちゃう……」

斎藤さんの胸は、俺の出した白濁液でべっとりと濡れそぼっていた。谷間から滴り落ちる精液の雫が、谷間をゆっくりと垂れていく。斎藤さんはそれを健気に胸を締めて何とか食い止めようとしている。